

『Japan To-Day (現時の日本)』 (4)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前回 (6月号) に引き続き、『Japan To-day』で紹介された天理教に関する記述を見ていく。著者の望月小太郎は、天理教の特徴を概説した後、教祖についてさらに詳しく説明している。まず、生誕から中山家へ嫁ぐまでの経歴を紹介。天理教の開祖は中山みきという女性であり、父・前川半七正信、母・きぬの間に大和国山辺郡三昧田村で生まれた。みきは情に厚く明るい性格で、何事にも器用であったという。13歳で中山家に嫁ぎ、妻としての責務を忠実に果たしたと述べている。

続いて望月は、みきが篤い信仰心によって神と一体となり、天理教の教えを説き始めた経緯を説明する。みきは美德、信心深さ、愛国心によって知られ、世間の慣習や礼節の腐敗を嘆きながら、地域社会の道徳的秩序の回復を願って天地の神々に熱心に祈りを捧げた。こうして徳を積み重ねた結果、やがて神と一体化するに至ったという。1838年、41歳の時、みきは数日間にわたって神に祈り続け、その結果、10月23日に容貌が大きく変化し、目は輝きを帯び、圧倒的な威厳を備えた存在となった。そして周囲の人々に向けて天理教の教えを説き始めた。当初、人々はその言動に懐疑的であり、精神的な疾患によるものではないかと考えて耳を傾けようとしなかった。しかし、理路整然とした語り口と、物静かでありながら威厳に満ちた態度には無視できない説得力があった。23日から26日にかけて、みきは圧倒的な熱意をもって教えを説き続けたため、人々は彼女が何らかの霊的な啓示を受けていると信じるようになり、最終的にはその教えに耳を傾けざるを得なくなったと論じている。

さらに望月は、みきが強い信念のもとで布教を続け、最終的に多くの信者を獲得したと述べる。彼女は敵対者からの非難や攻撃にも一人で立ち向かい、揺るぎない熱意と誠実さをもって神の意志に従いながら教えを説き続けた。その活動は50年に及び、やがて信者数は100万人に達したという。そして1887年、90歳で老衰のため亡くなったが、その徳は死後も人々に受け継がれ、信者数はさらに増加した。1908年11月27日には、政府が天理教を独立した神道の一派として認可したと説明している。

そのうえで望月は、天理教は一般的な神道とは異なり、人類救済を目的とする宗教であり、その教義には因果応報や極楽浄土などの仏教的要素が含まれているとの見解を示している。また、信者たちは「くにことたちのみこと」や「くにさづちのみこと」をはじめとする十柱の神々に祈りを捧げ、善行を積むことで蓄積した邪惡の塵埃を取り除くよう教えられているとしている。

続いて望月は、天理教の「聖歌」として、中山新治郎著『天理唱歌』(天理教会本部) から「敬神」、「尊皇」、「愛国」、そして「浄化の歌」として「祓除」を抜粋している。以下に、それらの日本語原文を示す。

廣き世界にありとある 人も獣も草も木も
玉も黄金も神々の 造り給はぬものはなし
造り給ひし神々に 願ひ奉りて後にこそ

如何なる事も人々の 思ふ儘には成るべけれ
神を信仰せぬ者は 人に生れて人ならず
神の救助を願ふには 三ツ子の心に成るがよい
生れし儘の心にて 祈れや祈れ世の為に
救ふは天理の大神ぞ 救ふは天理の大神ぞ (「敬神」より)

神に代りて大君は この国民を子の如く
慈愛みつゝ天が下 治めますこそ賢けれ
この大君は久方の 天つ御神の御裔にて
其の御位は天地と 共に榮えて限りなし
國てふ國に君といふ 君は有れども我国の
君に勝れる君はなし 君に勝れる君はなし (「尊皇」より)

神の造りし日の本は 東の洋の島なれど
氣候中和に地味肥えて 並ぶ國こそなかりけれ
花あり實ある民草の 露の恵に霑ほひて
いや継々に榮ゆ可く 守るぞ神の心なる
神の心を心なる 吾が大君の御稜威にて
御旗の風に靡かざる 國も無き迄成りにけり
其の御心を心にて 身の程々に稼業を
勉め励まむ国民の 家は繁昌するばかり
民の繁栄は國の富 富たる國と成りてこそ
神も悦び給ふらめ 君も悦び給ふらめ (「愛国」より)

神の授けし魂は 曇らぬ玉に異らず
玉に等しき魂を 汚すはやつの埃なり
目に触れ耳に聞く度に 積りに積る塵埃
拂ひ清めて後にこそ 富も誉も授からめ (「祓除」より)

これらの歌詞を紹介した後、望月は天理教が説く八つの穢れとして、greediness (貪欲)、covetousness (強欲)、partial and wicked love (邪愛)、partiality (偏愛)、malice (悪意)、anger (怒り)、evil desires (悪欲)、pride (傲慢) を挙げている。そして、これらを心遣いの否定的側面と位置付ける一方で、肯定的側面として loyalty and filial obedience (忠誠と親孝心)、friendship (友情)、love and obedience (愛情と従順)、faithfulness (信仰心)、love (愛) を紹介している。

さらに望月は、天理教における「清め」の思想は神道の浄化観念に由来し、「穢れ」の概念は仏教の教えに由来すると考察している。また、忠・孝・友・信・仁といった徳目は儒教および日本人固有の倫理観に起源を持つと分析し、天理教は神道・仏教・儒教という三つの宗教的・思想的伝統が融合して成立した宗教であると説明している。

最後に望月は、天理教の組織について次のように言及している。天理教の本部は奈良県山辺郡丹波市町にあり、総本山の長は中山新治郎である。また、全国各地に支部が設置され、2,400人以上の説教師を擁し、信者数は400万人を超える。そして、天理教は日本最大級の宗教宗派の一つであると評価して、天理教に関する記述を締めくくっている。